

科目名	現代世界と平和	開講学期	後期
担当教員	河野 健一	単位数	2単位
授業概要とテーマ	<p>ポスト冷戦の21世紀に入った現在も、各地で武力紛争やテロ、飢餓、エイズなど感染症の拡大によって多くの命が失われている。大量破壊兵器の拡散は地域の緊張を高め、地球温暖化をはじめとする環境破壊の進行は人類の存亡にかかわる脅威といえる。どうすれば人々が安心して暮らせる平和な世界を構築できるのか。そのために、国際社会、日本、私たち市民は何をすべきであり、何ができるのか。こうした問題意識に立って世界と地域の安定及び平和にかかわるカレントなテーマを取り上げ、多様な角度から考えるのが授業の趣旨である。現代史の最先端で生じている事象を教材とした「平和講座」であり、「平和学入門」である。</p> <p>授業は政府機関、研究者、NGOの活動家など学外から招いた講師と本学教員による講義を取り混ぜた混成方式で実施する。ただし、被爆地・長崎で行う平和講座であるので、最初の3回程度は被爆者の体験談など核にかかわるテーマとする。</p>		
到達目標	<p>戦争や民族・宗教紛争だけでなく、地球温暖化など環境問題、感染症、貧困や飢餓などを含む広義の安全保障概念に立って、平和と安定を脅かす様々な問題に目を開き、自ら考える力を身に着ける。</p>		
授業計画	<p>世界の動きに即応するためメインテーマは毎年変え、講座内容も年ごとに刷新する。たとえば、05年度のメインテーマは「戦後60年・被爆60年」、06年度は北朝鮮の核実験を受けて「大量破壊兵器・テロ・宗教民族対立」とした。08年度は「グローバル化時代の平和――国際機関・国家・市民の貢献」とする。</p> <p>グローバル化の時代、一國平和主義はもはや成り立たない。核の拡散、国際テロ、感染症は国境を超えて平和と人命を脅かす。地球温暖化は人類そのものの存続にかかわる。こうした問題に効果的に対応するには国境を超えた協力が不可欠である。紛争後の復興や平和定着、感染症対策などでは、国際機関や各国政府だけでなく、NGOや市民が大きな役割を果たすようになった。学外から第一線で活躍している専門家を招いて講義してもらう予定だが、後期の授業であるため、外部講師の招聘交渉は6月以降になる。この授業計画は暫定的なものであり、テーマや順番の変更があり得る。招聘交渉がまとまった段階で順次、確定的な講義スケジュールを書き入れる。</p> <p>途中で複数回、レポートを提出してもらう。講義を漫然と聞き流さずノートをしっかり取り、関係の新聞記事や本でテーマについての知見を深め、レポートに反映させる自主努力が不可欠である。</p>		
第1回	講義の趣旨説明と履修上の留意事項、グローバル化と平和概念の変容（河野によるオリエンテーションと講義）。		
第2回	「原爆の業火を生き延びて」――長崎の被爆者の証言。・ 長崎原爆被災者協会会長 谷口稜嘩氏		
第3回	長崎の鐘は今日も鳴る・永井隆博士の残したメッセージ・ 永井隆記念館館長 永井徳三郎氏		
第4回	平和運動とジャーナリズムの役割・ 長崎放送ディレクター 関口達夫氏		
第5回	海外のヒバクシャを救え・ 長崎大学医歯薬学研究科 高村昇教授		
第6回	世界の平和と安定にどう貢献するか…グローバル化時代の日独両国の責任・ ドイツ連邦共和国駐日大使 ハンス・ヨアヒム・デア氏		
第7回	国際連合の安全保障理事会が国際平和に果たす役割・ 李（岩本）禎之准教授		
第8回	人間愛はヒンズークーシを超えて……アフガニスタンで医療支援と農業指導に取り組む・ NGO「ペシャワール会」事務局長 福元満治氏		
第9回	パネルディスカッション「北東アジアの平和・安定・環境保全に向けて――日本・中国・韓国の連帯と協調をどう実現するか」――本学の中国・韓国出身の教員、河野の3人。		
第10回	オバマ新政権の対外戦略とその意味……安全保障と平和構築の視点から・ 毎日新聞社外信部 樋口直樹氏		
第11回	基地の島・沖縄から日米安保と日本の安全保障を考える・ 琉球新報編集局経済部 松元剛氏		
第12回	音楽で難民の子供たちを励ます……シリアのパレスチナ難民キャンプでの日々・ 元国際協力機構（JICA）海外青年協力隊 御厨祥子氏		
第13回	外国人留学生に長崎の思いは通じるか……英語で伝える被爆の惨禍と平和の願い・ 長崎大学熱帯医学研究所非常勤講師 田崎昇氏		
第14回	ドイツと日本の歴史認識（culture of Remembrance）について・ 良心的兵役忌避のドイツ人青年 ゲオルク・フライゼ氏・ 岡まさはる記念館長崎平和資料館と良心的兵役忌避のドイツ人青年の受け入れ・ 岡まさはる記念館館長 高貫康稔氏		

第15回	<p>創り出す平和—広島市民の活動から— 前広島市長 平岡敬氏</p>
学生に対する評価	<p>【成績評価の基準】 平成19年度以前入学生 A…80～100点 B…70～79点 C…60～69点 D…59点以下</p> <p>平成20年度以降入学生 A（秀）…90～100点 B（優）…80～89点 C（良）…70～79点 D（可）…60～69点 F（不可）…59点以下</p> <p>【成績評価の方法】 幾つか講義が終わるごとにレポートを提出してもらう。レポートの内容と出席回数・質問回数など授業への熱意を総合的に判定して成績評価を行う。</p>
テキスト	特になし。学外講師にも講義のレジュメを準備するよう要請する。
参考書	講義に関連する本など図書館で探して自分で読むこと。新聞も貴重な情報源。
履修上の注意等	<p>東京など遠方から専門家を含め多忙な人を講師に招いての講義だから、漫然と聞き流さずにノートをしっかり取り、後で読み直して内容を十分に理解すること。旺盛な好奇心を持ってテーマとかかわる新聞記事や参考となる本を読んで知見を深め、講義内容と併せてレポートに反映させてもらいたい。いずれの講義も質疑応答の時間を設けるので、折角の機会を活かして講師に質問をぶつける積極性を望みたい。テーマについて予習し、質問したい事項を考えておくぐらいの熱意がほしい。</p>